

射命丸 文

天狗は宴会を好む。特に秋は、紅葉狩りと称して連日酒盛りが行われる。会場は大抵、九天の滝のほとりだ。風光明媚さにおいては一番の場所だ。

男尊女卑がまかりとおっているため、お酌や芸は女の仕事だ。世話係は上から直接指名され、断れない。文とて、例外ではなかった。

場に連れられてきたときには、すでに宴もたけなわだった。おのおの楽な姿勢で敷物に座り、杯を傾けている。ずいぶん酒が進んでいるらしく、数名は赤ら顔を晒していた。

「おッ、今日の世話役かのお？」

視線が向けられる。参加しているのは、大天狗を最上位とし、妖怪の山の要職を占める鴉天狗たちだ。年功序列が基本なので、総じて老いている。

しわくちゃの顔をニコニコと、いやニタニタと歪めていた。目には悪意と侮蔑、好色がはつきりと浮かんでいた。

「ほれえ、射命丸、皆様に挨拶をせんか」

「……本日皆様のお世話を務めます、射命丸文でございます」

大天狗に命じられ、ずらりと並んだ長老らを前に、深々と頭を下げる。男どもに見えぬ角度で、奥歯を噛みしめた。

もう何度、宴に連れてこられたことか。これ以上誰にも気に入られず、だからといって

つけ込まれる粗相もせず切り抜けねばならない。容易ではないが、やらねば尊厳はさらに喪われるだろう。

「来たなあ射命丸。ワシがくれてやった服は、ずいぶん似合っておるなあ」

いちおう職務の一環なので、着ているのは普段の服ではなく天狗装束だ。ただし、幹部連中から渡された特別仕立てだった。

襟がなく、肩口は大胆すぎるほど開いている。腕を上げれば腋窩が露出するし、横乳房も垣間見える。胸元は大きく広げられ、谷間が姿をちらつかせている。

本来なら行灯袴を着用するのだが、今日はない。極めて短い前垂れだけで下腹を隠している状態で、黒の長足袋を履いた美脚が曝け出されていた。

セクシーを通り越して、もはや品がなかった。もちろん、好きで着ているわけではない。呼び出しのかかる数日前に、たかがいち記者にお偉方がわざわざ贈ってきたのだ。空気を読まねば、どんな目に遭わされるかわからない。

「はい。素敵な贈り物を、どうもありがとうございます」

「そうかあ、そうか。今度また、別なのを着せてやるからのお」

「ありがとうございます」

また別なのを着せる。つまり、あと最低一回は呼び出される。嫌悪が滲み出さないよう

努めながら、うわべだけの感謝を返す。

老人共の目は、意地汚い色を孕んでいた。目の前の獲物をどう捌つてやるか、思案しているのだ。

「……で？　ちゃんと言いつけは守っておるんじゃないかな？　皆で確かめてやるべきではないか？」

「じゃな。どうもこやつは我々に対する奉仕の意識が薄いし、仕事にも不熱心じゃからの。サボっておつても仕方ないわい」

「あり得るのお。ずる賢いからのおこの女は。ワシらをナメておる」

「いえ、そんなことは」

「おう、言い訳か？　よけいに怪しくなってきたのお。なおさら、全員で見てやらにやあいかなわなあ、コレは」

唇を噛む。何を言ったところで、妖怪の山を牛耳る連中に逆らえるわけもなかった。

諦めると、装束の前垂れを指で摘まむ。持ち上げ、はしたない部位を自ら晒した。

「……かしこまりました。どうぞ、射命丸文の忠誠の証をごらんくださいませ」

上層部の定めた規則により、宴会に参加する女達は下着の着用を認められない。むろん、文もだ。恥部を隠すにはあまりに心許ない布の下に、ショーツなど存在しなかった。

剥き出しになった恥丘には、黒々とした毛がぼうぼうと生い茂っている。剃るべからずと命じられてから、数ヶ月ほど経っていた。もともと体毛の濃い体質だったため、もはや密林と化している。

「言いつけは守っておるようじゃな。どれ、もつと近くで見てもらえい。一人一人にの」「かしこまりました」

たくし上げた前垂れを下ろすことすら許されなかった。上座から順に、座席を巡るよう命じられる。屈辱だ。虫けらを見る目を向けられても、にこやかに対応せざるを得ない。齒向かえば、よけい酷い結果を招くからだ。

「はーっ、メス臭いのお。毛が濃いのは淫乱じゃというが、本当なら貴様はどうしようもない女ということになるのお、ええ？」

縮れ毛に占領された三角地帯を、まったく無遠慮に見つめてくる。鼻息がかかるくらい近くで、匂いまで嗅がれる。片手には杯がある。女性の貞操を、酒の肴感覚で扱っている。宴会の世話係とは、しょせん建前だ。下衆を煮詰めた連中が、お酌をさせただけで満足などするわけもない。実態は、大天狗をはじめとした長老の玩具だ。

特に文は、もとからお偉方に目をつけられていたのもあり、狙い撃ちにされた。若手で頭角を示しており、上に対しては反抗的で、誰もが抱きたいと思うほど見目麗しいからだ。

今までに何度も呼び出されては、おつまみ感覚で尊厳を蹂躪されてきた。今日も同じだ。恥辱の時間は、まだ始まったばかりだった。

「下ッ品なビラビラじゃのお。昔はもうちよつと可愛らしかった覚えがあるが」

「そりゃあおぬし、宴のたびにワシらがマワしまくつとるからじゃろ。緩くなるのも当然じゃな。まっ、名誉じゃろ、長老勢の寵愛を賜つとるわけじゃからな。ガハハ！」

己の性器を他者の視線に晒しては、扱き下ろされる。吐き捨てられた罵倒を、隣の席の天狗が混ぜつ返した。声色からして、こちらを意思ある生物とは認めていなかった。

実際、彼女の陰裂は、かつてと様変わりしていた。美しくひっそり咲いていた小陰唇は、見るも無惨に踏みにじられている。色素が沈着し黒ずんだ花卉は剥き出しで、ピンク色の粘膜を晒していた。

ひどいときは小一時間ほど責められ続けた淫豆は、今や小指の先ほどのサイズになっていた。一目で弱点と分かる。

酔っ払いに犯されたのも、一度や二度ではなかった。たいていは周りで見ている連中も混ざってきて、何度も輪姦された。まごうことなきレイプだが、訴える先の要職を、この場の連中が占めているのだ。ただ泣き寝入りするしかなかった。

「これ射命丸や。わしや腋と乳が見たいんじゃのお？」

「かしこまりました。どうぞご覧下さい」

内心でどう思っているようにも、命じられれば笑顔で受け入れるしかない。面積の小さな装束をはだけ、肌を露わにする。

右腕を持ち上げ、腋窩を見せつける。つるりとした窪みはフェチズムの対象だ。好色な視線が這い回る。

乳房はカップでいえば大きめのD程度で、豊かさや形の均衡を両立させていた。つんと上向いた曲線は、見る者を魅了する。白く滑らかな肌もあいまって、実に見事だった。

柔らかな山の先端、乳輪はこんもりと膨れている。濃い褐色だった。もともとは今より平坦で、色も淡かった。何度も弄ばれ、蹂躪されたが故だ。

「おほほ、悪くないのう。味のほうはどんなもんか」

「ッ、は、う」

本人の許可など取り付ける必要なしとばかりに、むちゅうう、と吸い付いてくる。舌で舐め回され、アルコール臭い唾液まみれにされる。

気を許してもいない輩に体を弄ばれるのだ。嫌悪して当然だ。一方で肉体は、じくじくと響く官能を見出す。数え切れないほど陵辱されるうちに、ほんの少し触れられただけでも感じるほどに造り替えられてしまっていた。

「ぢゆるッ、ぢゅッ、れろッ、カリッ」

「ッひんッ！」

れろれろと舐められ、先端を甘噛みされる。気色悪いと思っても、ソリッドな刺激には声を抑えられない。

「ほれえ、何を間拔けな声をあげとるか。気合いを入れんか、気合いをお」

「もっ、うしわけ、ごさいませ、っは、あ、くううう」

別の天狗が揶揄しながら、剥き出しの恥部を指先でなぞってくる。下半身から上る恍惚が、腰を震わせる。思い通りの反応をしてなるかと思っても、甘い吐息を抑えられない。

意思と裏腹に、乳首が充血し始めた。芯が通って硬くしこりはじめた先端を、キュつとつねられる。蕩けてしまいうさだ。

情けないのおとあざ笑いながら、男達は離れ、ひらひらと手を振る。人の貞操を弄んでおいて、興味がなくなつたから失せろというのだ。ありがとうございましたと頭を下げ、次に向かう。

「どうぞ、ごらんくださ、ッひい！」

「濡れておるではないかあ。この淫乱があ」

クリトリスに酒臭い吐息を浴びせられ、さらには指先でびいんと撥ねられる。颯られ

続けて肥大化した弱点を持て遊ばれ、目の裏に響く性感が走り抜けた。

「なんじゃこの程度でヨガリオつて。根性が足りんのじゃ、根性が。ワシら世代はこんなもんで動揺せんぞ、若造があ」

「ッう、あ、はい、すみませ、ッ、あ、ああッ」

親指と人差し指で摘まみ上げられ、クリクリクリと転がされる。膝がカクつき、姿勢が崩れそうになる。どうにか堪える。

性刺激を与えられ続け、ねとつく汁が体内から分泌され始める。もちろん、意地の悪い彼らが見逃さないわけもなかった。

「すぐ濡らしおる。なつとらんぞ、ええ？」

「う、はッ、あ」

滴る蜜を指で掬い上げ、見せつけてくる。にちゃッ、にちゃッと糸を引く蜜は、感じていることのなよりの証拠だ。

「ッふ、はッ、はあッ、ひい、はあ、あうッ、あああ」

肉体は意思に背き続け、快楽に溺れている。前垂れを落とさず、体勢を保つのに必死だ。なにか粗相をすれば、罰と称して弄ばれるのは目に見えている。

まだまだ甘い考えだった。なにもせずとも、悪意は向こうからやって来る。

「どら、そんなもんでええじゃろ。貴様の忠誠心はよく分かったぞ？ 射命丸よ」

ようやく解放されたと安堵するにはまだ早い。宴会が終わるまでは、手を変え品を変え貶められるのだ。古いぼれたちが愉悦を味わうためだけに。

「では貴様には、芸のひとつでもやってもらおうとするか」

大天狗が持ってきたのは、ペニスを模した玩具、つまり張型だった。瑠璃でつくられており、上位天狗の成金趣味を示している。全長二十センチ以上、太さにして五センチほどある大業物だ。幹にあたる部分には襞と瘤があしらわれている。挿入すれば、えげつなく膣肉を抉るだろう。

間違はなく上級者向けの逸品を、散歩するくらいの気楽さで差し出してくる。拒まないよな？ と、目には無言の圧力があらわれていた。

「ただマンズリをこくだけではつまらんからのう。貴様が本気を出せるよう、ちよつとした余興を用意してやったぞ」

宴会場の真ん中に、書道で使う画仙紙が二枚並べられた。片方には、水をぶちまけたか、濡れた染みが残っている。

「潮を噴くまでマンズリせい。片方は前の宴で、貴様のお友達の大走とかいうイヌコロにやらせたときの記録じゃ。まさか鴉天狗が、白狼天狗に負けたりはするまいなあ？」

「……は、もちろんです」

いち天狗の交友関係まで把握しているのか。山を率いる立場なのだから暇ではあるまいに、人を卑しめることにかけては余念のない連中だ。

自分が勝てば、橈が根性無しとか言われて踏みにじられるのだろう。だからといって、手を抜くわけにはいかなかった。誰しも、最終的に一番かわいいのは自分だ。

「では皆様、ここで余興として、わたくし射命丸文がこちらの張型にておマンズリを披露させていただきます。どうかこの淫乱な鴉天狗のどうしようもないザマを、笑ってやってくださいませ」

深々と頭を下げる。無数の視線を受けながら、画仙紙の前に腰を下ろし、蹲踞の姿勢を取る。さらに、大きく脚を広げた。M字開脚のポーズだ。短い前垂れでは秘部を隠すのに足りず、下着をつけない秘裂が剥き出しになった。

「何をしとるんじゃないやあ、もつとちゃんとおめこを見せんか、使えんのう」

野次をぶつけられる。繁茂した陰毛に守られる、爛熟し黒ずんだ陰唇に指をかけ、自ら割り開く。先ほどの露出行為と愛撫で濡れた粘膜は、ねっとりした蜜を分泌しながらヒク、ヒクッと蠕動していた。

好色な目が浴びせられる。質量があるのではと思うほど、ぎらぎらとした目を。精液を

ぶちまけられているかのごとき感覚に、子宮は意思を裏切り熱を孕んだ。とろみを帯びた蜜が溢れ、地面に滴る。

「はッ、ア……れろっ、れろれろれろ……」

石造りの張型の、先端に舌を這わせる。挿入にともなう性器への負担を軽減するため、唾液で濡らしておく。フェラチオを連想させる淫らな様に、男達から歓声が漏れた。彼らを楽しませるためではなかったのだが、勝手に満足してくれるぶんにはむしろ助かる。

竿全体を舐め回し、十分に濡れたのを見計らい、膣口に押し当てる。にちゃあ……、と卑猥な水音がした。九天の滝から響く音に掻き消されなければ、全員に聞かれていたろう。「ふッ、お、おッ、くふッ、おお……っ」

自らの体内に潜り込ませる。巨大な亀頭部が狭穴を押し広げていく。何十回、何百回と異物を受け入れてきた膣肉は、本来あるべき状態に戻ったのだといわんばかりに悦ぶ。脳に快楽信号が送られ始める。

分かっていたが、玩具はやはり太かった。みちみちと肉が拡張される感覚に、低い声を抑えられない。下品な声じゃと冷やかされたが、聞いている場合ではなかった。

「っふ、ッは、ア」

やがて、二十センチを越える疑似巨根が、すべて体内にねじ込まれた。取っ手の部分が

膣口からそびえたつ様は、間抜けであり退廃的だ。

先端部が子宮口を圧迫し、腰の抜けそうな性感をもたらしってくる。崩れてしまいそうなのを、気合いをいれて堪える。全員の見ている前でそんな無様を晒せば、罰と称して何をやらされるか分からない。

「ッ、おッ、つはあ、あッ！ あッ、ひッ、おッ、おッ、おおおんッ！」

もちろん、挿入れて終わりではない。むしろ今から始まるのだ。手を繰り、張型を抽送させる。ぐぼッ、ぬぼッと空気混じりの猥褻音をあげ、膣口は異物を受け入れる。

太い幹が隘路をみっちり埋め尽くしている。あしらわれた瘤が、性感粘膜をぎりぎりど抉る。脳味噌に叩きつけられる性感が、膝を笑わせる。

いきなり激しいオナニーだった。理性のトんだ声が響く。天狗の丈夫な体でも、相応の負担がかかる。が、己を氣遣っている場合ではない。下手に手を抜いてつまらないと判断されれば、もっと酷いことをさせられるに違いないのだ。

「はひッ、ひい、おおッ、あはあッ、くふッ、おお、ッ、おおん！」

「かーっ、なんじゃありゃ。下品なマンズリじゃのお。おしとやかさの欠片もないわい」

「これだから若いのはいいかん。特に射命丸みたいなこまっしゃくれたあばずれは最悪じゃ。どこにも嫁の貰い手がないわい」

ぐぼぐぼと淫音を鳴らし淫蜜をまき散らす肉穴をあざ笑ひ、口々に好き勝手を抜かす。エクスタシーと悔しさで頭がぐちゃぐちゃになる。気が狂いそうだった。

「ひい、ひい、ッ、はあ、あうッ、お、おッ、くふうう」

ちよつと触れられただけで悶絶するほど敏感になったクリトリスを、親指で揉み潰す。腰がガクガクと震えている。目を白黒させながら性感に溺れる文へ、さらなる悪意がぶつけられる。

「射命丸ウ。貴様そんなもんで満足できるのかア？ 性欲旺盛な貴様が。ホレ、ええもんを見せてやろう」

おもむろに近づいてきた天狗は、下半身を丸出しにしていた。

雄々しき男根が、勃起し逞しくそびえ立っている。今使っている張型を上回る巨根だ。亀頭は大きく張り出し、雁首は深く刻まれている。凶悪に反り返ったボディはどどめ色に染まっていた。何十人と女を食い物にする中で愛液を浴び続け、淫水焼けを起こしたのだ。「はあッ——はッ、あッ、はッ」

視線をそらせない。むわりと漂う雄の臭いは不快なはずだが、鼻孔はヒクついていた。何度も快楽を刻みつけられ、服従を擦り込まれてきた肉体が、ご主人様を歓迎している。陵辱される身の上をどう思っているようにとも、性感には抗えない。アレにほじくられたら

どうなるだろうと、想像せずにはいられない。自然と、張型を操る腕の動きが激しくなる。ぢゅぶくぶぬぶと、愛液がこねられ卑猥音を奏でる。

「ぐふっ。夢中じゃのう」

シユツシユツシユツと、目の前で見せつけながら扱っている。玩具で喘ぐメス天狗の痴態を肴に、オナニーしているのだ。対する文も、その様に興奮し、自洩のペースを上げていく。いわば相互の自慰行為だった。

男が手を上下させるほど、むせ返るほどのペニス臭がまき散らされる。知らず知らず、唇を尖らせていた。決して、不満に思っていたわけではない。

宴のたび、下手をすれば二桁の回数、フェラチオさせられていた。結果として、雄臭をトリガーとして、無意識に奉仕を始めようとするほどになっていた。パブロフの犬と同じ、条件反射だ。

どうしようもなく墮落した様に、男は愉悅を見出したらしい。柔らかで艶やかなリップに、汚らしいモノの先端を押し当てる。

「ちゅっ、う」

触れたことで、文もようやく、自分が何をしていたか気づいた。あらわれた動揺を笑いながら、彼はさらに何度も、男根で唇を汚していく。

「ッは、ッう、ちゅ、つ、むちゅ、んちゅ、んッ、フウ、フウ、フウウッ」

押しつけられるたび、蕩けそうな熱が唇から伝わってくる。次第に、自ら雄杭にむちゅむちゅとキスし始める。

興奮をふうふうと鼻息に乗せる様に、普段見せている余裕や威厳はない。目は見開かれ、瞳孔も開いていた。

「えあ——」

「何をしゃぶろうとしておるか」

むらむらとこみ上げてくる欲望に負け、口を開く。が、奉仕はさせてもらえなかった。ぶるんと振るわれた肉竿で、頬をべちんと叩かれる。

屈辱的な扱いにすら、甘い官能を覚えてしまう。張型で自らを撟るかたわら、がに股を押っ広げ、へこへこと腰を躍らせる。

「まったく、隙を見せればコレだ。どうしようもない雌天狗だの、お前は」

「んちゅ、ちゅっ、ちゅっ、申し訳、むちゅう、申し訳ございません」

謝罪の合間にも、竿全体に唇の雨を降らせていた。その様に、普段見せる余裕や威厳は欠片もなかった。自分が嫌になるほど、どこまでも惨めだ。

「ううッ、はあッ、ちゅッ、はあ、むちゅッ、ああ、ちゅう、はあ、ッ、おッ、おッ、お

ッ……ッ！」

差し出された肉魔羅に接吻しながら、玩具を操り続ける。オナニーは当初に比べてすら、なお激しくなっていた。本物のペニスを前にして昂ぶった性的興奮に駆り立てられている。乳首も淫核もこれ以上なく硬く勃起し、激しく自己主張していた。全身には汗が浮かび、血行の良くなった肌が朱に染まっていた。

「おッ、くひッ、はおッ、おおん、っはああッ、イ、イクウ、イクイクイクウ……ッ！」
ぢゅぽぐぶぬぽぐぬぽと、えげつない抽送を繰り返す。体内の水分が干上がるほどにまき散らされる愛蜜がなければ、擦り切れる勢いだ。

当然、覚える快楽も大きくなる。聞き苦しい声で喘いだ先に訪れるのは、強烈きわまるアクメだった。

「おほッ、ええぞ、イケイケ。みつともなくイきちらせえ」

「気張れよお、犬コロに負けるなあ」

宴会場が下卑た笑いで満ちる。己の痴態をげたげた嘲笑われながら、なおも自らを矜り続ける。快楽の頂点へ至るのに、さほど時間はかからなかった。

「おッ、ひッ、おおッ、くは——イクウウウウウウウウウ——ッ——ッ！」

エクスタシーの波に合わせて、張型を最奥まで突っ込む。ぶぢゅんッ、と聞き苦しい音

とともに、子宮口を先端が小突き上げる。さらに、ぷっくり膨れたクリトリスを、自らの指でつねり上げた。最大の弱点たる性感帯を、一切の容赦なくだ。

腰がぐくんと跳ねる。快楽に狂った声が九天の滝に響き渡る。視界が白く染まり、思考を吹き飛ばす官能が全身を満たしていく。同時に、牝臭漂う愛蜜がぶしいツと噴き出した。物理法則に従って放物線を描いて飛び、彼女の前に敷かれた画仙紙を濡らす。

「ひいッ、はひッ、はあッ、はウ、ッ、はあ、あああ」

がくッ、がくッと、駆け抜ける性感で体は二三度痙攣した。反動で力が抜け、ぐったりと崩れ落ちる。消費した酸素を取り入れるべく、肩が上下する。柔らかな乳房がふるん、ふるんと震えている。汗で前髪が額にはりつき鬱陶しいが、直すのも億劫だった。

「また随分と、派手に気をやったのう。余興にしても激しかったが」

「天性の淫乱じゃからな。売女の本性を發揮したつてところじゃろ」

口々に好き勝手を囁かれている。漂白された思考では、悔しいと思う余裕すらなかった。ただぼんやりと、生物の本能に従って呼吸を整えるばかりだ。

手から解放された張型が、膣圧に押し出されて雌穴から抜ける。瑪瑙でできたボディは、蜜に濡れててらと輝いていた。

自分自身にはじくられた穴は、もはや閉じなくなってしまうていた。ピンク色の内側を

晒しながら、ネトつく汁を垂れ流している。くぼつくぼつと収縮する様は、黒く色づいた陰唇の印象もあって、水揚げされた貝を連想させた。

「ほほ。ずいぶん飛んようだの。あの犬コ口もそうじゃったが、みつともなくイキ散らしおつて。雌臭くてかなわんわい。一発芸にしても下品きわまるしのお」

ぞろぞろと、長老どもが集まってくる。二枚の画仙紙に、下卑た目をやる。つうん、とオンナの香りを漂わせる染みを見比べている。

紙が持ち上げられ、並べられた。潮の痕がくつきり残されている。それとは別に、文が座っていたあたりは特に濡れていた。自決の最中に飛び散った卑猥蜜だ。一生モノの恥が、一枚の紙に刻まれていた。

「のう、犬走のが飛ばしてないか、こりゃ」

「はあ？ いやあ、こんなバカみたいな勝負とはいえ、鴉天狗が犬に負けはせんじやろ。

……あ、いや、ホントに負けとるなコレ。おい射命丸、どういうつもりじゃア貴様ア」

「うぐッ！」

脇腹に蹴りを入れられ、叩き起こされる。痛みに身をよじる暇もなく、引き起こされた。ぐるりと取り囲まれている。

嗜虐的な目が注がれる。付けいる隙を見せたな？ と言わんばかりだった。

「せっかくワシらが目をかけてやっておるのに、何じゃあ、情けない」

「地べた虫の連中に負けるとは、許されんことじゃ。もはや鴉天狗である資格もないわ。どうする？ 羽エ抜くか？ 犬コロどもや皿つきと一緒に、地べたで生きるか、んん？」

「お、お願い致します、どうか翼は」

慌てて地に伏し、頭を下げる。普段ならば土下座など決してしないが、今だけは別だ。黒い翼は鴉天狗の誇りだ。羽をむしられるのは実質的な死刑に近い。「羽無し」は周囲から村八分にされるからだ。

頭を踏みつけられる。額が地面にめり込むが、声を上げることも許されなかった。

「ふん、さんざん無様によがって、あげく負けておいて、ずいぶん都合のええことじゃ。まあワシらも鬼ではない。別の罰で許してやるわい」

「ご厚情に、感謝いたします……」

「言うとする暇があるなら、仰向けになって股ア開かんか。気がきかんのう」

罵られながらも、言われるまま従う。閉じられぬよう、両脚を左右から抱え込まれた。未だ絶頂の余韻にヒクついていいる陰裂に、下卑た目が注がれている。

「これだけ濡れとりや、クリームも要らんあ。つるつるの、恥ずかしいマンコに造り替えてやるからのお」

彼らが持ち出したのは、剃刀だった。下腹に押し当ててくる。雌蜜に濡れててらと輝く、くろぐろと茂った陰毛を狙っているのだ。

剃るなど命じたときから、最終的にはこうするつもりだったに違いなかった。いったいどれだけ悪趣味なのか。湧き上がる嫌悪を、胸の中で抑える。

「ッ、あ、ありがとうございます。どうぞ射命丸文のおまんこを、罰として童女のほとんどのようにしてくださいませ……」

「動くなよお？ 汚いビラビラを切られなくなかったらなあ」

刃が肌の上を滑り、しよりしよりしより……と小気味よい音がたつ。密林のごとく生い茂った毛が、一本残らず剃り上げられていく。

「しっかしまあ、えらい剛毛じゃの。刃が通りにくくてかなわんわ」

縮れ毛をつまみ、思い切り引っ張ってくる。痛い、顔が歪まぬよう努めた。この扱いはまだマシだと、己に言い聞かせる。「羽無し」にされれば、もはや山では生きてゆかれぬのだから。

「ほほ、堪えるのー。ならこれはどうじゃ」

「イひいッ!？」

痛みに似た強烈なエクスタシーに、腰が浮く。勃起しっぱなしのクリトリスを、ぴんと

指先で弾かれたのだ。堪えられるわけもなく、みつともない声が漏れた。

「じつとしとれと言うとろうに。おめごとばつさり剃りたいんか？ 天狗でも流石に痛いぞお、たぶん」

「うッ、うう、うううう」

目には笑えない光が籠もっていた。あまり動けば本当に「事故」を起こすつもりだろう。眉尻を垂れ下げながらも、どうにか堪えようと奥歯を噛みしめる。

咲き誇る陰唇を撫で回し、陰核をこねながら、刃を進めてくる。執拗なまでに何度も。毛がちぎられるぷちぷちという感覚をはつきりと感じた。

刃先が陰裂からほんの数ミリほどの距離を通ってゆく傍らで、小指の先ほどもある陰核を刺激される。本能的恐怖と快感が同時に襲ってくる。頭がおかしくなりそうだった。

「どれ、こんなもんか」

「あうッ」

狂いそうな時間も、ようやく終わる。三角地帯を満遍なく剃刀が這ったのだ。仕上げとばかりに、ぴしゃりと大陰唇を叩かれる。

酒がぶちまけられ、剃り落とした縮れ毛の滓が流される。露わになったのは、今までと打って変わって、つるりとした陰部だった。密林に覆い隠されていた、なだらかな恥丘が

露わになっている。さながら二次性徴を迎える前だ。だからこそ、だらしく熟れきった花弁の様子が対照的で、異様に見える。

ああおとした剃り跡に無数の目が向けられている。指先で擦られて、翩られている。ぞくぞくとこみ上げる感覚に、意思と裏腹に淫蜜が滴る。

「おーおー。我ながらええ仕事をしたわい。ええトシしてつるつるの、こつ恥ずかしいパイパンじゃ。誰が見ても頭おかしいマンコじゃぞ。よかったなあ？ 射命丸よ」

「ちようどいい記念じゃ。今日から射命丸だけは、宴以外でも下着着用を禁止にするか。誰にも説明せずにな。幻想郷じゅう飛び回って、使い込まれたビラビラのくせにツルツルのマンコを、皆に見てもらえい。変態じゃと思われながら過ごせ。嬉しかろう？」

「か、……かしこまりました。本当に嬉しいです。ご高配に、感謝いたします」

「いったいどれだけ、尊厳を奪われるのか。それでもなお、卑屈にへりくだるしかない。」「いやあ、感謝するには早いぞお射命丸よ。なんせ、お前が一番大好きなことを、今からしてやるんじゃないのう」

「そうじゃな。せつかくどこに出しても恥ずかしい下半身にしてやったんじゃ。使い心地を試さんことにはのう」

「……ッ」

言つて、長老共が服をはだける。下衣を下ろし、禪を解く。露わになつたのは、えげつなく反り返り、そびえ立つ勃起した男根だ。ぐるりと取り囲まれる。三百六十度、どちらを向いてもペニスがある。逃げ場などどこにもない。

かつては麗しかった秘裂を、黒ずんだあばずれの穴に造り替えたのは、他ならぬ彼らだ。またいつものように、男共が欲望を放ちきるまで、輪姦されるのだ。

「どうした？ 貴様の好きなモノをくれてやるというとるんじゃ。言うことがあるんじゃないのか、ええ？」

「あつ、あ、あ」

にたにたと笑いながら、鼻先に亀頭を近づけてくる。呼吸のたびに、雄臭が鼻孔に流れ込む。脳味噌にキク匂いだ。

ゾクッ、ゾクッと、腹の奥が震えた。数え切れないほどほじくられ、踏み躪られてきた体が、己のなんたるかを思い出す。無意識のうちに、地に膝と手をつき、額を擦りつけた。何度も何度も何度も、悪夢のごとく繰り返されるうち、魂の髓に刻み込まれた服従の仕草。すなわち、土下座だ。

「皆様、本日は私、鴉天狗の恥こと射命丸文に格別のご配慮を賜りまして、どうもありがとうございます。皆様の御手で新たに生まれ変わらせていただいたパイパン変態おまんこ

で、たっぷりヌキヌキさせていただきます。今も皆様のご立派を欲しがって涎を垂らす肉穴を、どうぞたっぷり、ずっぱり奥までご賞味くださいませ。お金玉の中身が空になるまで、いやらしく締め付けてご奉仕いたします」

言い切ってから、自らが何を口にしたか気づく。もはや遅かった。男どもは皆、邪惡の権化のごとき表情を浮かべながら、彼女ににじり寄っていた。

「はん。誇り高き鴉天狗ともあろうものが、チンポ狂いの変態に成り下がるとうのは。我々全員で教育的指導をしてやらねばならんか。どれ、まずはワシから」

「お主はそっちを持って、よし、よし、ええぞ」

乱暴に抱えられ、仰向けに転がされる。両足首を掴まれ、広げさせられる。ささやかな抵抗として、股を閉じようとするこすら許されないのだ。

大天狗が乱暴に覆い被さってくる。アルコール臭い息を、顔面に吐きかけられる。酔いの回った目に、理性の色はなかった。慈しみなどは存在せず、相手をいたぶり楽しむ嗜虐心だけがうかがえる。

「そおら、貴様の好きなチンポじゃろうが。出迎える準備をせんか、愚か者」

「ああッ！ ど、どうぞ、おまんこの奥までご覧下さいませ……」

打擲音が響いた。不手際への喝として、頬を叩かれたのだ。遠慮も容赦もない、頸椎に

負担を感じる威力だった。

痛がつている暇はない。己の下腹に手を伸ばす。黒ずんだ陰唇に指先を引っかけ、割り開く。にちゃあ、と粘っこい水音が開いた。

「まったく汚い穴じゃのう。どれ、先にチンポの臭いでも染みこませてやるか。歩いてるだけでチンポ臭をふりまくようになれば、どういう女か誰にでも分かるじゃろ」

「豆腐の売り歩きみたいなもんじゃな。声じゃなく臭いが近づいてくれば、射命丸文じゃとわかる。鼻を摘まんで石を投げるなり、物陰に連れ込むなり、ご自由にな」

「は、っ、あ、くう、ああん」

好き勝手を口にしながら、濡れきった秘唇に男根を擦りつけてくる。にちっ、にちっと、愛蜜がこねられ卑猥音をたてる。

ぞくぞくとこみ上げる官能の中に、裏筋にクリトリスを刺激されて、ソリッドな性感が混じる。意思とは裏腹に、腰はゆるやかにうねっていた。

「ほ。穴ポコが犯されたがつとるわい。まったく貴様は、鴉天狗の汚点じゃの。どら——よく味わえい！」

「アッ、はう、ひッ——ああおおおッ！」

あざ笑い見下しながら、陰裂に対し亀頭を垂直に押し当ててくる。次の瞬間、文の貞操は、

一息で深々と刺し貫かれた。めりめりめりッ、と、こなれた雌穴を雄棒が割り開く。なんの遠慮も思いやりもなく、ずっぽりと奥まで侵入する。

天狗は種族として巨根だ。長くを生きてきた長老ともなれば、種馬と見紛うほどになる。魁偉なる大業物が女穴を押し広げる感覚には、目を見開いてよがるほかになかった。

まして今は、陰裂を最低限でも守る下腹の茂みすら喪っている。守るものなきパイパンは、犯される性感をダイレクトに伝えてきた。

「ッおお……ガバガバに見えて、よく絡みついてきおるわ、まったく。ほおれ分かるかあ射命丸。貴様の穴に、ワシの金魔羅がずっぽり入っておるのがなあ」

「はひッ、ひいッ、ああッ、ああッ、あはああッ」

またしても犯された。生けるものとしての最低限の誇りさえも奪われ、踏み躪られた。だというのに、涙は流れなかった。喉から漏れるのは嬌声で、スレンダーな腰はくねつ、くねつとうねっていた。

快楽への敗北を何度も何度も脳幹の底にまで刻まれて、本性はすっかり雌になり果てていた。ペニスをねじこまれれば、肉体は悦び、奉仕しようとするに決まっていた。

「おほほ。ええぞええぞ、そりゃ、好きだけくれてやるわいッ、ほれッ、ほれッ」

「アッ、あ！ ひッ、はッ、あうッ、ひいッ！ はッ、ああッ、あああ！」

甚だしい反応に氣をよくしたか、男は腰を振りとくり始める。亀頭が抜ける直前まで腰を引いたかと思いきや、膣穴の最奥まで叩きつける、重量級のストロークだ。

ごりごりごりごりツと、膣襷が蹂躪される。何度も犯され開発されきった雌穴は、己をほじくり倒してくれる素敵なモノに絡みつき、締め付ける。腰がぶつけられると、結合部からは愛蜜がぶちゅぶちゅと音を立ててまき散らされていく。

「はひえッ、あひッ、ひいッ、おおッ、ほッ、ひッ、うはああ」

「きつたない喘ぎ声じゃの。猿かなにかか」

「天狗の納める妖怪の山にはまったくふさわしくないのお。やはり身内の恥じゃなあ」

バシッ、バシッツと下腹が打ち付けられあうたび、堪えがたい快樂が脳天を直撃する。蹴けられてきた脳髓が、意思に背いて白旗をあげる。普段なら出さない声で喚き、全身を痙攣させてよがる様を、両手で足りぬ男達が口々に嘲笑っていた。

「ほれほれ、こういうのがええんじやろうが、淫乱」

「いッ、アッ、アッ、ひいッ、あくううッ、ひいひいんッ……！」

反応に氣を良くしたか、男は手を変え品を変え、文にエクスタシーを叩きつけてくる。ピストンの様子が変化していく。体重全てをぶつける荒々しい動きから、奥を執拗に狙う狡猾なストロークへ。

赤子の腕ほどもある長太竿は、最奥の行き止まりまで簡単に届いた。子を成す聖域への入口、やわらかな子宮口を、コンコンコンコンと何度も何度もノックしてくる。

「はへッ、あひッ、ひい、ひいッ、つくはあッ、おッ、おッ、あうううッ」

ポルチオはデリケートな部位だ。乱暴に小突くなど、まったく論外の行いだ。生殖機能が駄目になってもおかしくない行為であり、普通なら覚えるのは痛みだけだ。

が、彼女は違った。何十回、何百回と穿たれほじくり返されてきた。もちろんそこも、開発済みだ。神経の集中した敏感きわまる性感帯は、逞しき男根の執拗なピストンに屈従していた。

突き上げられるたび、目の裏がチカチカと光る。剥き出しの淫豆に男の陰毛が擦れては、ゾクゾクと堪えがたい快感が上る。噛みしめた奥歯の隙間から、聞き苦しい声が漏れる。もはや何を考える余裕もない。意識にしがみついて、官能の暴虐が通り過ぎてくれるのを待っただけだ。

「なあにを一人だけよがつておるか。根性を見せい、根性を！」

「ああおとおおッ！」

もちろん、そんな消極的なありかたを、連中が許すはずもない。気合い注入とばかりに、陰道半ばの腹側を亀頭でゾリゾリと擦り上げてくる。いわゆるGスポットを思い切り刺激

され、尿道から濃い飛沫がぶしいと噴き出した。

たたき起こされた雌の本能が、躍起になつて仕事を始める。細い腰がうねり、くねり、踊り始める。男を悦ばせる、卑猥なムーブメントだ。レイプされているにもかかわらず、本気で性交を望んでいるかのごとき振る舞いだつた。

「おほッ、おッ。そうじゃそうじゃ。それでええんじや。ほおれ、続けいッ。続ければ、ご褒美をくれてやるぞお」

「あはあッ、あんッ、あひいッ、はッ、あッ！ くふッ、はあッ、ああうッ」

スパンスパンッと腰をぶつけながら、勝手を抜かしてくる。褒美とやらがろくでもないものなのは理解しながらも、うねうねと媚びた腰使いを披露してしまう。

「わはは。ええのお。酒の肴にびつたりじやの」

「ほおれ射命丸ウ、貴様も呑め、呑め。貴様のような変態にお誂え向きの酒じゃぞ？」

朱塗りの大盃を差し出される。なみなみ注がれた酒には、白いモノがどろりと浮かんでいた。言うまでもなく、精子だ。何人もの男共がせんずりを抜き、ぶちまけたのだ。獲物と定めた女に、異常な形で吞ませるためだけに。

誰かが嫌悪する汚汁を、恍惚の瞳で見つめる。ペニスに暴かれた本性が、あれが欲しいと訴えかけていた。女として最大の弱点を凶器でほじくられる今、抗う余裕などどこにも

なかつた。

「はッ、ちゅッ、ちゆるッ、ぢゅぞッ、ぢゆるるるッ」

音を立てながら、白濁の浮かぶ汚汁を啜っていく。天狗の酒は呆れるほど強い。決してこんなペースで呑む品ではない。喉が灼けそうだが、気にも留めない。でろでろと咽頭に絡みつく、精液の最悪の喉越しがたまらなかつた。

「気ッ色悪いことをしておって。セックスに集中せんか！ ええッ!?」

「んおおうッ！」

アルコール混じりの精虫の味を堪能する間も、ピストンは決して止まらない。むしろ、こつちを見ろとばかりに激しさを増す。内側からめくれ返るほどの勢いには、喉の奥からくぐもつた声を漏らさずにはいられなかつた。

「んぐッ、ぢゆるッ、ぢゅぞッ、ぢゆるるッ……んはああ」

やがて、杯は乾される。どろどろと浮かんでいた、何人ぶんかも分からぬ精虫とともに。げえつぷと、下品な音が喉から溢れた。吐息から、酒とスペルマの匂いがぷうんと漂った。「はん。あんなもん呑むなんぞ、いよいよ気が狂ったか。まあ、穴が使えるならどうでもええがの。おッ、そろそろ上ってきたぞ、おッ、おおお……ッ！」

「んはああッ、ひいッはッ、おッ、くふううう……ッ！」

抽送は激しさを増す。ばすんばすんと、貫く相手をも吹き飛ばす勢いだつた。大天狗の声が詰まると、焦燥を浮かばせる。膣内では肉棒が膨れ上がって、危険なほどの熱を孕み始めていた。

間違はなく、射精が近くに違いなかった。ごりごりと急角度で挟られ、文はもはや夢心地だ。男根に屈した肉体がすることは、たった一つだった。腰を躍らせ、穴を締め付け、より気持ちよくぶっばなしていただくのだ。

「はへッ、あつはつ、だして、出してくださいませえ、淫乱変態駄目天狗の射命丸文にいつ、大天狗様のお種をくださいませッ。ゴスゴス突かれてよがるだらしない子宮にいつ、どろどろのザーメンぶちまけて、イかせてくださいませえっ！」

「そうかそうか。そこまで頼まれれば仕方ないのお。可愛い部下のお願いじゃア、聞いてやろうじゃないか、そらいくぞ、いくぞお、出すぞオ、おッ、おおおッ！」

「あはッ、あおッ、いくッ、いくいくいくいくうううううッ——あっへアあああああああああッ！」

どぢゅん、と、体内から肉の潰れる嫌な音が響く。柔らかな最奥を、これ以上なく硬くなった雄杭が思い切り突き上げたのだ。子宮口が亀頭と熱烈なキスを交わし、むぢゅんと音をたてる。同時に、最後の瞬間が始まった。

天狗は極めて好色な種族で、精液もおそろしく濃厚だ。溶いた澱粉糊ほど白く粘ついた汚濁が、鈴口から勢いよく放たれる。どぶどぶと、腹の奥を満たしていく。

間歇泉センター奥のマグマですら、これほど熱くはない。夥しい精虫が鞭毛を蠢かして生まれた熱が、子宮を墮落させていく。

当然、アクメに至る。押し寄せる快楽の波に、一瞬で呑み込まれる。間抜け極まる嬌声をあげ、半ば白目をむいた。腰は反り、全身痙攣し、雄を咥え込む肉穴から濃厚な愛蜜が噴き出した。

見下され、踏み躪られ、陵辱の果てに子種まで植えられた。間違いなく最悪だと理性は告げている。一方で、雌としての本能は、身から溢れんほどの快楽を間違いなく最高だと告げていた。相反する感情に、気が狂う。暴力的なオーガズムの前にひたすらよがり狂う以外、なにもできなかった。

「はひっ、はひえ、あへ。……うひい……、えへっ、えへえ」

やがて、絶頂が引いていく。知性をすべて破壊されきった文は、ただただ虚ろな笑みを浮かべるばかりだ。口端から、涎が零れている。

「おお……出した出した。まったく、ほとんどどうしようもないくせに、穴の具合だけは一丁前だの」

グリッ、グリッと、最後に腰を押しつけてくる。たつぷり余韻を味わってから、大天狗は腰を引いた。吸い付いていた膣口が男根を喪い、ぶぼつと聞き苦しい音を立てる。

太棒で乱暴に穿たれ続けた肉穴は、もう閉じなくなっていた。黒ずんだ花びらやピンクの粘膜を晒し、ネトつく雌汁を滴らせては、ぐぱぐぱと収縮を繰り返している。どろお、と白濁が垂れた。望んでもいない種を植え付けられたことの、何よりの証左だ。

ゴシゴシと己の魔羅を扱き上げ、尿道からでろお、と快楽の残滓を吐き出す。大陰唇に滴らせる。パイパンに生まれ変わった恥丘が、白く汚されていった。

「何を惚けとるか間抜け。早う掃除せんか。気がきかんのう」

「あはあ、あは、むちゅつ、んちゅ、んちゅう、ちゅう……」

そうさせたのが誰かを棚に上げ、大天狗は肉竿を文の眼前に突きつける。半萎えの雄茎は、複数の汁でべとべとに汚れていた。

もはや日本語を理解するだけの思考もないのに、自然とソレに口づけていた。無意識の底にまで擦り込まれた作法ゆえだった。

「いやあ、流石大天狗殿。小生意気な雌天狗に己の分際を教えてやったようで。どおれ、次はワシが」

「おいおい、待たんか。序列から言えばワシが先じゃろうが」

「ええい黙つとれ粗チンが。お主が使った女は臭くてかなわんのじゃ」

大天狗が「使い終えた」のを見て、老人共が白い肌へ次々群がり始める。股座のモノは一樣に膨れ上がり、獲物に狙いを定めていた。

「あは……えへつ、えへ、あはあ……ッ」

彼らが飽きるまで、悪夢の時間は続く。全てが終わったとき、自分はいったい、どうなっているか。意思是黒く塗り潰される一方で、口には好色な笑みが浮かんでいた。